

実践③ 出水市立野田中学校

1 はじめに

本校は、平成18年に出水市と合併した旧野田町を校区としている。本校区は、鶴の渡来地として世界的に有名な出水平野の西部に位置しており、島津始祖五代の石塔群（五廟社）を始め、由緒ある神社・仏閣等の歴史的遺産も多く、熊陳・本町通りは今もなお野田郷武家屋敷の面影を残している。

生徒数は現在106名で、「心豊かな人間の育成」を掲げ、ボランティア活動や地域行事へ積極的に参加している。出水市全体で読書推進に力をいれており、本校の図書充足率(130%)が高い理由として、地元の篤志家から61年間続いている図書寄贈の功績も多大である。この学校図書館の豊富な蔵書を活用し、地域や家庭と連携しながら読書推進活動を展開している。

学校図書館には学校司書が常駐し、蔵書数は8,728冊である。

2 学校と地域や家庭、公共図書館と連携した取組

(1) 野田地区一小一中の連携

一小一中の強みを活かして、読書を通じた小中交流を行っている。「昼休みオンライン読書交流会」を行ったり、「読書ゆうびん」を送りあったりしている。令和5年度には、中学生が事前録画したミニビブリオバトルを小学生に披露し、それぞれ投票してもらった。この活動は、小学生に楽しんでもらおうと、準備や活動を図書部中心で行った。



ミニビブリオバトルを視聴する小学生の様子

(2) 読書ボランティアによる読み書かせ

地域の読書ボランティア「紙ふうせん」による読み聞かせやブックトークを学期1～2回、学級ごとに実施してもらっている。11月の鹿児島方言週間に合わせた「方言（昔話）読み聞かせ」では、方言や出水の昔話を語っていただいている。「紙ふうせん」は野田小学校にも長年訪問し読み聞かせを実施しており、生徒も懐かしそうに聞き入っている様子がみられる。



茶わんむしの歌と一緒に歌う

(3) 家庭で本を話題にしよう！家読推進への取組

家族と連携し、ギフトブックの取組や読書回覧、宝本エピソード等の取組を実施している。各家庭では、本の話題で盛り上がり、家族間のコミュニケーションが生まれた。出水市が提唱する「家読20分運動」の趣旨に沿い、1年1冊以上の読書の取組として実践した。具体的には、絵本を各家庭で回覧し、保護者が「ひと言感想」を記入して共有する仕組みを取り入れた。感想一覧は後日配布し、それに伴う保護者間の交流も生まれた。



読書回覧

(4) 出水市立野田図書館訪問

学校から徒歩で行ける地の利を活かし、国語の授業を利用して集団訪問（貸出利用）を各学年、年1回実施している。図書館では生徒が自由に本を選び、貸出利用を行っている。



公立図書館利用の様子

野田図書館側も、「中学生におすすめ」特設コーナーを設置するなど、積極的に協力していただいている。特設コーナーから本を選んだり、友人同士で本を薦め合ったりして、読書意欲が高まる様子がみえる。利用促進に繋がり、学習目的での利用も増加した。「小中読書ゆうびん」の展示や図書部の「SNS 風ポップ」も展示され、訪れた地域の方にも好評を得ている。

3 生徒の読書意欲を高める取組

(1) 企画展示の充実

読書指導と学校司書が協力して6月と11月の読書旬間や普段の館内掲示で、来館したくなるような展示や企画、読書の内容を深めるような企画を考え、実施している。具体的には、歴代の生徒が残してきた「ひとことポップ」の常時展示や生徒がデザインを競う「しおり総選挙」などの企画を行った。



ひとことPOP

特に「しおり総選挙」は、美術部がない本校で、美術が得意な生徒に毎回人気がある企画である。これらの企画を通じて、生徒の読書への興味関心が高まり、貸出冊数の増加につながっている。

(2) 図書部の主体的活動

図書部が、自分たちで企画を考え、主体的に活動を行っている。読書旬間中の「お昼休みの読み聞かせ会」や、出水市の読書活動推進の取組「読書パネル」の制作に取り組んだ。今年度は、月一回程度、「移動図書館のだ号」の取組を開始した。朝読書の前に、廊下で貸出・返却ができるようにし、貸出への呼びかけも行う。学級文庫は毎月、自分たちで選書して入替している。毎年、活動の見直しや新規の取組を積極的に行うことで、自主的な活動が充実してきている。



移動図書館の様子

4 今後の課題

今後は、教科横断的な読書活動を推進し、国語科以外の教科でも活用していく。生徒が必要な情報を調べるために蔵書検索システムを利用したり、効率よく必要な書籍を検索・利用したりして、タブレット端末と書籍での情報収集を支援できるようにしたい。

5 おわりに

読書の習慣が定着し、年間貸出冊数をほぼ全員がクリアするなど、生徒の読書活動は着実に成果を上げている。今後は、質の高い読書体験や幅広い分野の本との出会いを通じて、生徒一人ひとりが知の探求の喜びを感じられるよう支援していく。また、家庭や地域を巻き込んだ読書の輪を更に広げる取り組みを継続していく。